

2 稲添遺跡出土の瓦塔について

今回の調査で出土した瓦塔は全部で18点で、焼成はすべて土師質であり、色調も淡橙色～赤褐色を呈している。ほとんどが10号溝址の埋土中か、その周辺で出土しており、出土状況から瓦塔はこの溝址に廃棄されたものと考えられる。焼成がやや他と異なるものがあるが、大部分の破片については焼成、胎土、表現方法などに共通性が認められ、同一の個体と考えられる。

ここではひとまず破片を瓦塔の部位について分類し、焼成、出土地点などの違いについてはそれぞれのところで述べることにする。

屋蓋 (図159 1～10)

4が10号溝付近トレンチ、5がP1で出土しているが、他の破片はすべて10号溝址からの出土である。1～3は瓦部分と軒裏からなる。瓦部分は半截竹管状工具を引き下ろし丸瓦のみを表現しており、軒先から約3cmのところに継目が一つ施される。丸瓦の幅は0.6～0.7cmと一定している。軒裏には垂木が表現されるが飛檐垂木、地垂木の区別はない。垂木は長さ2.5～3.0cm幅約1cm。ケズリ出しにより、内側に向かって厚みを減じ、幅もやや広がる。断面形は三角形を呈する。軒裏は垂木以外の部分でもケズリ調整が多用される。4は焼成が他の破片とやや異なり、別個体の可能性もある。垂木の幅も1～3に比べてやや広い。5～8は軒裏部分が剥落しており、瓦部分のみである。9・10は瓦部分の内側に隆帯が四角く巡り、四隅で降棟が分岐する部分である。10の場合、隆帯によって囲まれる部分の大きさは復元で一辺13.5cmである(10-②)。隆帯は断面方形で幅約1.6cm、ただし降棟部分は断面形は丸みをおびる。屋蓋裏側にはケズリに伴う浅い溝状の調整痕が多数みられる。なお、丸瓦の表現方法は他の破片と同じである。

軸部 (図160・161 11～16・18)

軸部はすべて10号溝址から出土している。11は4同様、焼成が他の破片とやや異なる。内面の剥落が著しいが、軸部の四隅の角にあたる部分であろう。12は軸部中央につく斗拱部分である。軸部上端から斜め下方に階段状(凸字状)の張り出しを作りだし、手先の三斗と尾垂木を一体化して表現している。持ち送り部分は欠損している。13は軸部の四隅の角に45°方向につく斗拱部分である。縦方向の突帯が持ち送りを表わしている。先端部を欠損しているが、18の四隅につく斗拱と同じく階段状の持ち送りになると思われる。14は軸部上端から出る斜めの張り出しである。15は軸部四隅の角の部分であろう。16は縦方向と横方向の突帯が合わさる部分で、突帯は柱と台輪の表現であろうか。18の軸部にはこうした突帯の表現は見られないことから、初層の軸部の一部と考えられる。18は軸部の全体を唯一復元できる破片である。四隅を除き一辺に二つ以上の斗拱がつくとするとあまりに横方向に長い軸部となるので、図のように一辺の中央に一つの斗拱がつく形態を考えた。高さ8.8cm、下辺の横幅14.6cmである。この軸部が何層目になるかは不明であるが、大きさから見て二層目以上で、10の屋蓋よりも下にくると思われる。図の左側面から正面にかけて線刻によって柱、台輪が表現される。正面中央部には線刻は見られないが、これを右側欠損部には復元すると方三間の表現となる。台輪上に大斗、壁付の三斗等の表現はない。軸部上端から屋根状の張り出しを持たせ、四隅と一辺の中央部に斗拱を作り出す。12、13同様この斜めの張り出しは粘土帯を軸部に貼りつけ、階段状に切り出し、手先の三斗と尾垂木を一体化して表現しているものと考えられる。高崎(1989)によれば、このような斗拱の表現方法は群馬県の上西原遺跡、上野国分寺跡などの瓦塔と類似するものであり、これらとの関連が注目される。なお、軸部全体の成形についてであるが内面に粘土紐の接合痕らしいものが一部にあるが、屋蓋部に見られたようにケズリ調整が多用されるため明確には分からない。

基壇 (図160 17)

17も10号溝址から出土している。基壇から初層の軸部にかけての破片である。基壇は二重で、この破片には初層の開口部らしい部分はない。内面には屋蓋、軸部同様ケズリ調整が見られる。

小結

瓦塔の編年については近年、高崎光司氏の研究があり、軸部斗拱の変化を核として、地域ごとに4時期に区分した編年案を示している(高崎1989年)。長野県内の瓦塔についてはこれまで、林和男氏の集成(林1985年)があるものの出土例が関東などに比べて少ないうえに、土器等を明確に伴う例が塩尻市菖蒲沢窯跡などに限られること、斗拱部分の出土例が少ないことなどから、時期的な変化、地域差などについては不明な点が多い。

本例を高崎氏の関東における編年にあてはめて考えると、破片がすべて土師質であること、粘土を切り出して斗拱を成形していること、一軒構成であることなど三期以降(9世紀以降)の特徴を持つ。また10号溝址で瓦塔に共伴する須恵器坏、黒色土器坏などから見ても、本瓦塔の所属する年代は平安時代前半(9世紀代)と考えるのが妥当であろう。

県内では、本例も含め14遺跡で瓦塔が出土しているが、北信地方においてこれだけまとめて瓦塔が出土したのは今回が初めてである。従来、長野県内の瓦塔については出土例が松本平や上田地方に多い傾向にあった。また、寺院址ないしは付近に寺院址が推定できる遺跡からの出土が多いとされてきたが(林1985年)、近年寺院址以外の集落址や窯址での発見例も増えつつあり、県内の瓦塔出土遺跡の分布等についても再検討を要する時期にきているといえる。

最後に、今回出土した瓦塔について塩尻市平出遺跡考古博物館の小林康男氏、鳥羽嘉彦氏、市川二三夫氏、長野県埋蔵文化財センターの伊藤友久氏にご教示を頂いた。また未発表の岳の鼻遺跡の資料の掲載については、上田市教育委員会の中沢徳士氏の快諾を頂いた。記して感謝申し上げたい。

(出河裕典)

参考文献

林和男 1985年 「信濃の瓦塔」『信濃』37巻4号

群馬県教育委員会 1986年 『上西原・向原・谷津』

高崎光司 1989年 「瓦塔小考」『考古学雑誌』74巻3号

表21 県内の瓦塔出土遺跡

番号	遺跡名	所在地	遺跡の性格	備考	文献
①	前林廃寺遺跡	飯田市 竜丘	寺院址	・瓦	1、2
②	御射山遺跡	飯田市 毛賀	集落址	・瓦	3、4
③	大門遺跡	塩尻市 大門		・土壇状の遺構	5
4	菖蒲沢遺跡	塩尻市 片丘	窯址	・鳥形硯・須恵器	6、7
5	吉田川西遺跡	塩尻市 吉田	集落址		8
⑥	城山腰遺跡	松本市 蟻ヶ崎			9
7	北栗遺跡	松本市 島立	集落址		10
⑧	明科廃寺遺跡	明科町 明科	寺院址	・瓦	11、12、13
⑨	唐臼遺跡	上田市 常盤城		・塔心礎	14、15、16、17、18
⑩	信濃国分寺跡	上田市 国分寺	寺院址		9
⑪	堰ノ口一遺跡	上田市 手塚		・瓦	9
12	岳の鼻遺跡	上田市 下室賀	集落址		未発表
⑬	青木遺跡	更埴市 八幡	集落址	・瓦	19、20
14	稲添遺跡	長野市 徳間		・瓦	

※本表は林和男氏の論考（1985年）を基にし、それ以後の出土例を加えたものである。番号に○印のついているものが林氏の集成によるものである。

文献・註

- 1 大沢和夫「前林発見の瓦塔について」『伊那』1961-7 1961年
- 2 遮那真周・遮那藤麻呂「伊那谷南部における初期仏教とその歴史的背景」『長野県考古学会誌』49 1984年
- 3 佐藤甦信『毛賀御射山遺跡』飯田市教育委員会 1987年
- 4 岡田正彦「御射山遺跡」『下伊那史』第1巻 1991年
- 5 一志茂樹・小松虔「塩尻市下大門の瓦塔遺跡」『信濃』11-8 1959年
- 6 塩尻市教育委員会『瓦塔と古代東国』1989年
- 7 塩尻市教育委員会『菖蒲沢窯跡』1991年
- 8 長野県埋蔵文化財センター『中央道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』3 吉田川西遺跡 1989年
- 9 林和男「信濃の瓦塔」『信濃』37-4 1985年
- 10 長野県埋蔵文化財センター『中央道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』8 北栗遺跡 1990年
- 11 原嘉藤「長野県東筑摩郡明科町明科廃寺地について」『信濃』7-7 1955年
- 12 原嘉藤「古代の信仰」『東筑摩郡松本市・塩尻市誌』第2巻 1973年
- 13 三好博喜「奈良・平安時代の明科」『明科町史』（上）1984年
- 14 川上元「上田市唐臼出土の瓦塔」『上小考古』5 1973年
- 15 川上元「上田市諏訪郡唐臼出土の瓦塔について」『上田小県誌歴史研究紀要』1 1973年
- 16 黒坂周平「亘理の駅について」『千曲』1 1974年
- 17 黒坂周平「亘理の駅」『上田・小県群』第1巻 1980年
- 18 石川好一「千曲川穂渉にかかわる亘理駅についての一考察」『信濃の歴史と文化の研究』（二）1990年
- 19 岡田正彦・竹内三千夫「長野県更埴市大字八幡青木遺跡発掘調査報告書」『長野県考古学会誌』14 1972年
- 20 森嶋稔「第五様式期の生活遺跡」『更埴埴科地方誌』第2巻 1978年
- 21 信濃国分寺資料館『一信濃国分寺とその時代—古代の寺院』1990年

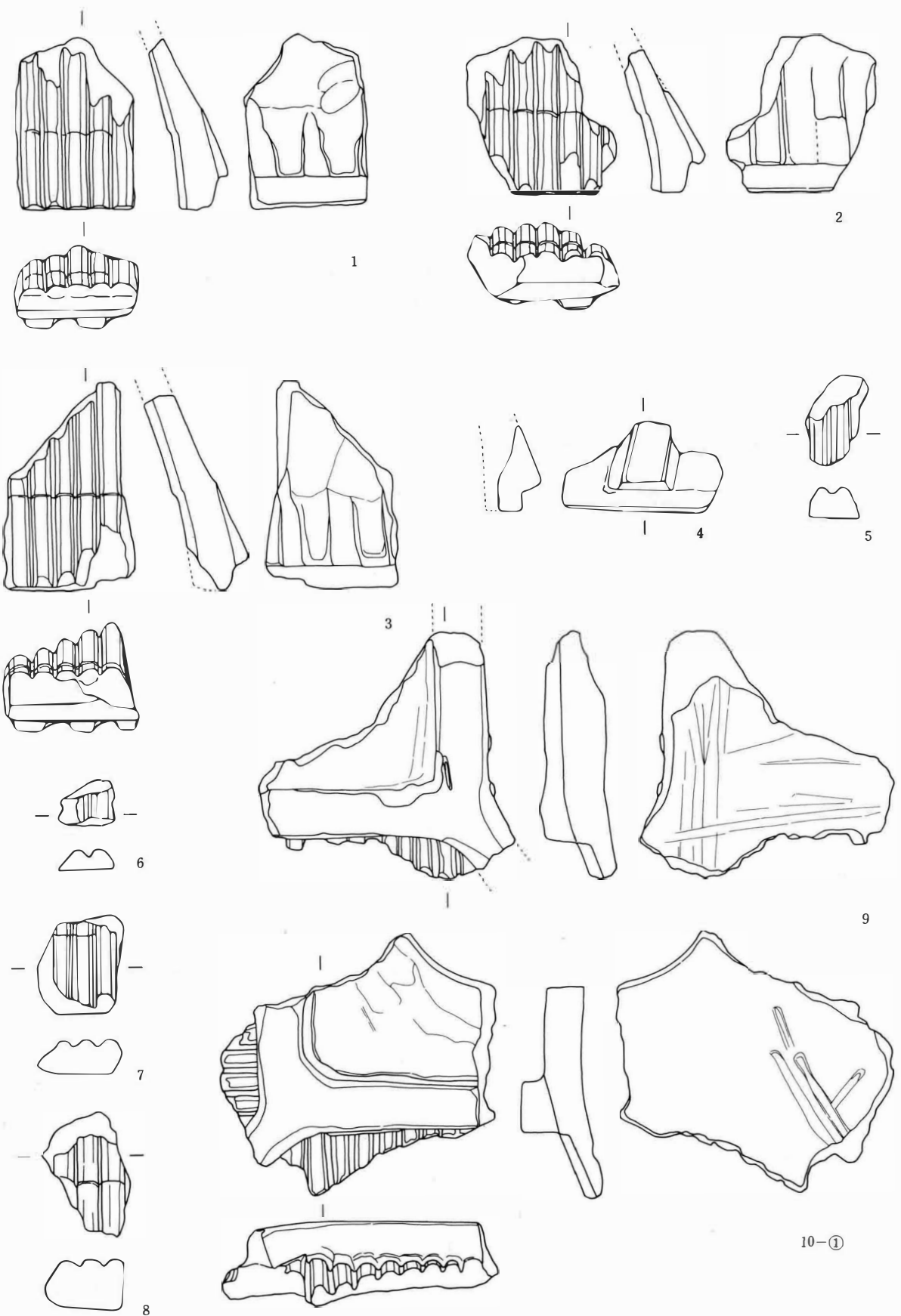


图159 稻添遗迹出土瓦塔实测图①(1:2)

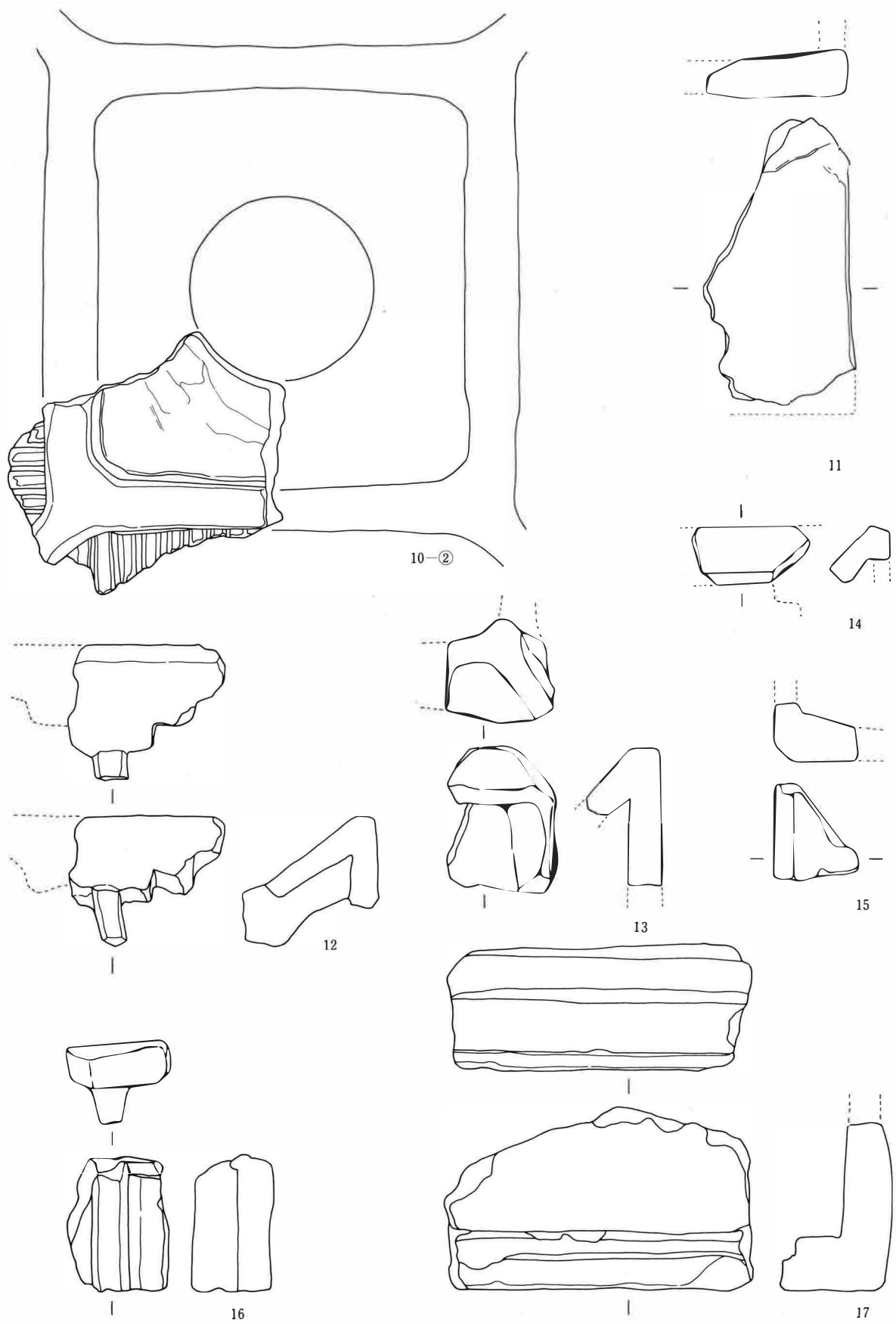


图160 稻添遺跡出土瓦塔実測図②(1:2)

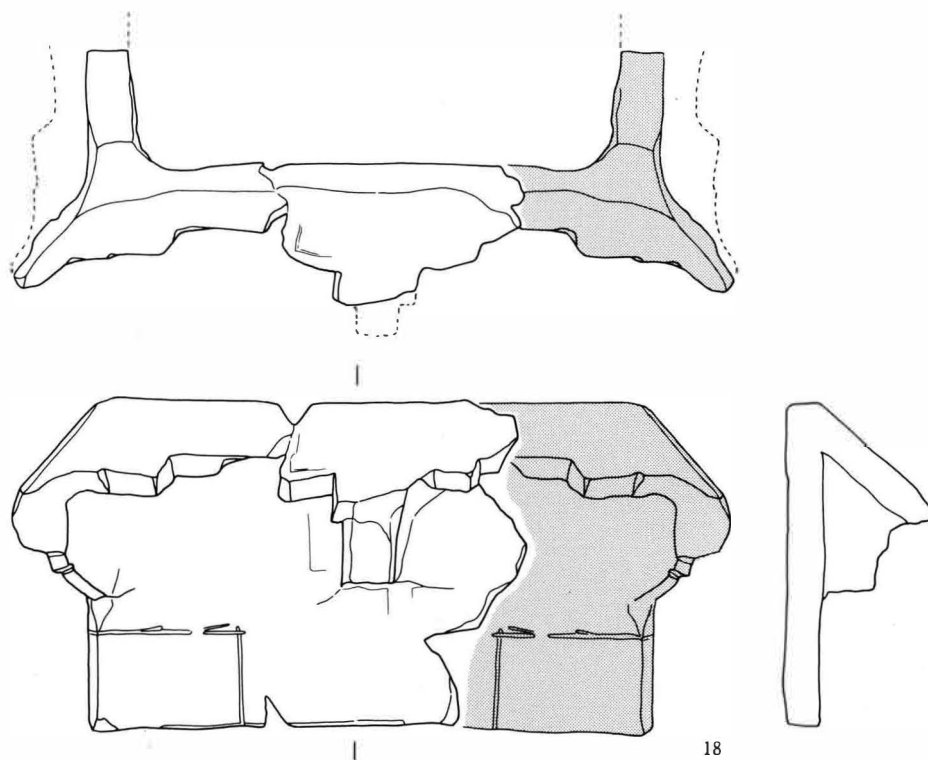
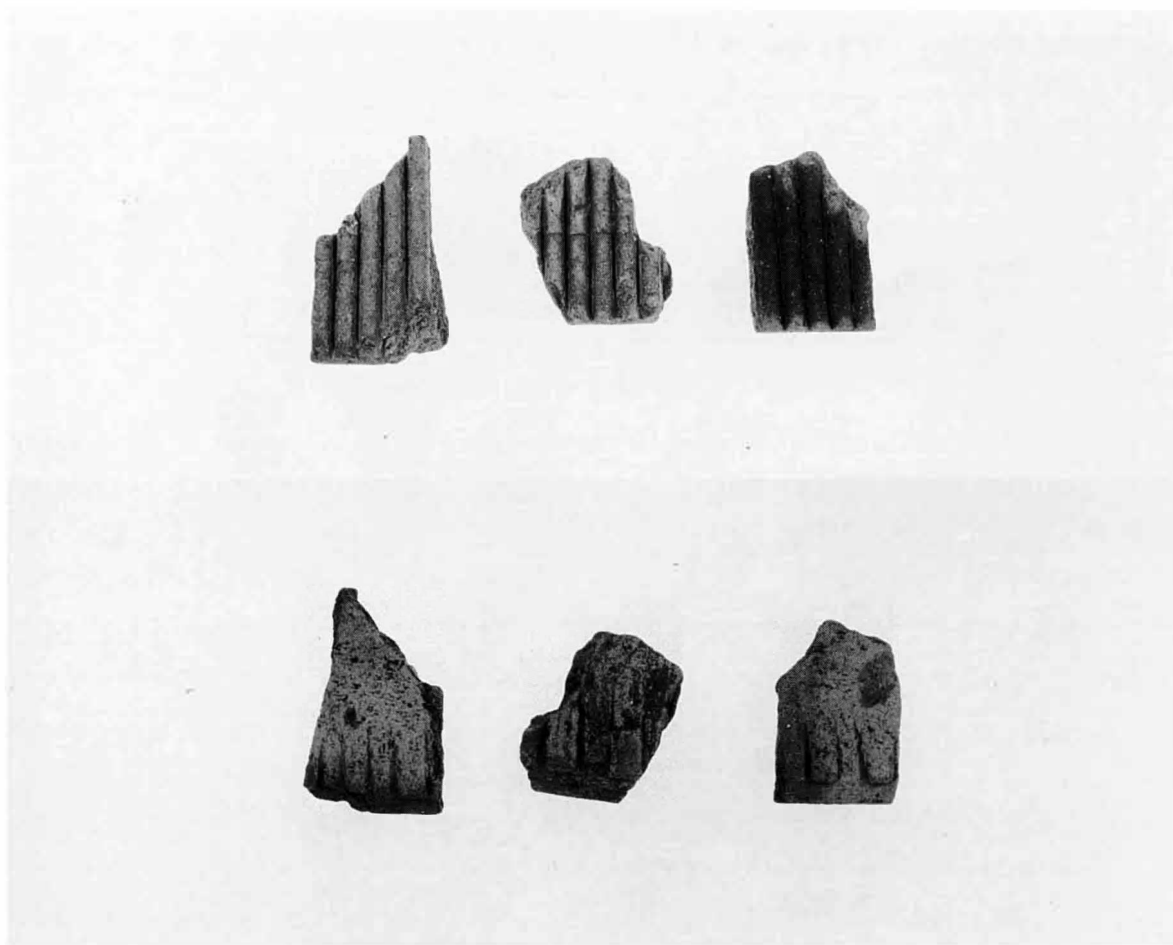
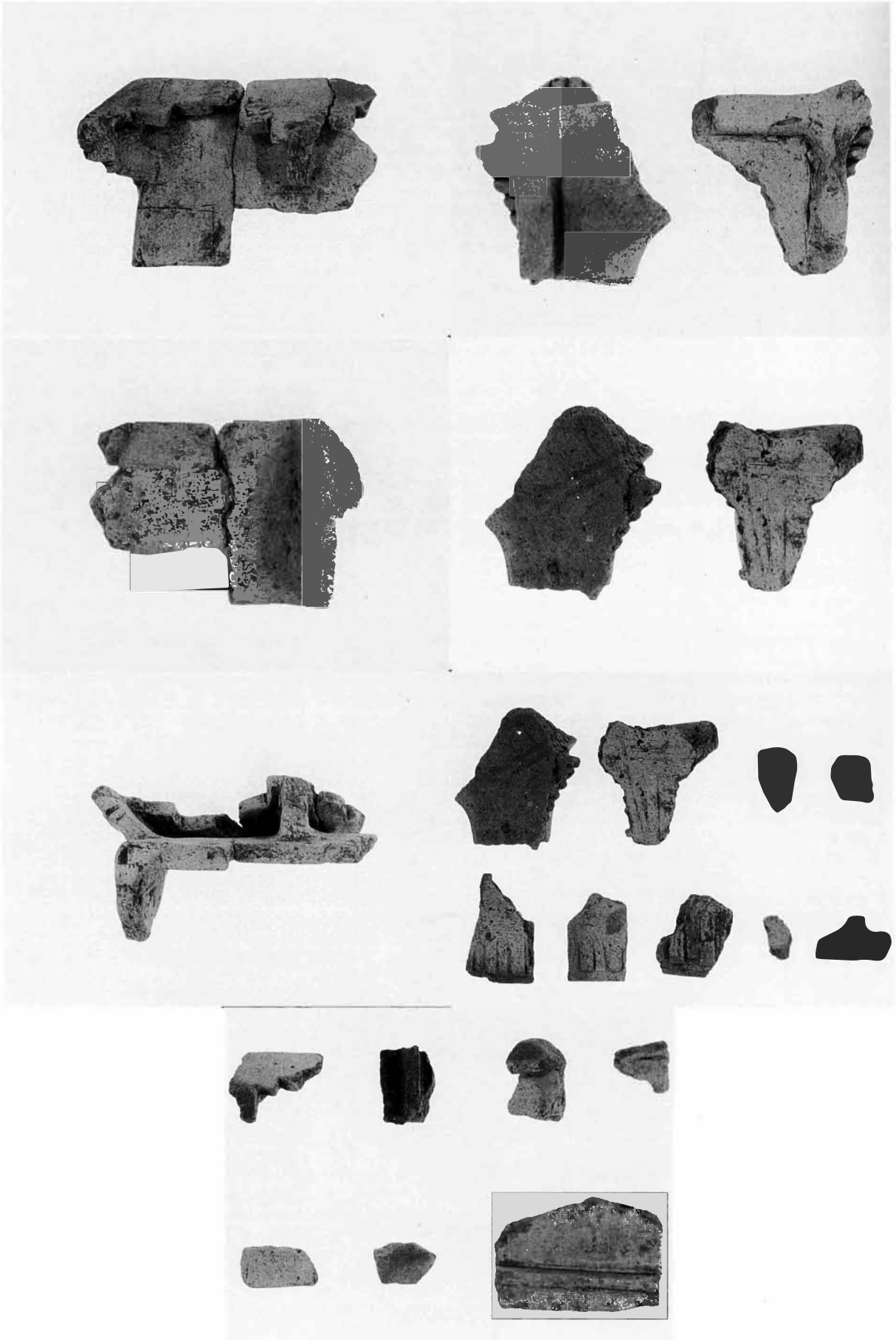


图161 稻添遺跡出土瓦塔実測図③(1:2)





3 若槻地域における古代仏教文化の一考察

今回の調査によって特筆すべきは、善光寺平における古代史、とりわけ、古代の仏教を考えるうえで重要な遺物が多く出土していることである。この詳細については、本報告書の各項に譲るが、これらを総合的に判断すると、従来言われてきたような、善光寺平の古代史像とは少し違った側面が表われてきたように思われる。ここでは浅学ながら、私がこれまで考えてきたことの一端を開陳するとともに、今後の研究の方向性を提示してみたい。

(1) 本遺跡をとりまく環境

本遺跡は、古代東山道の越後に抜ける支道周辺に位置している。これは字境地図のうえに表われた直線を想定しての考え方である。今回の調査ではこの想定地も調査対象にされたが、道の痕跡は確認されなかった。しかし、古代にあっては交通の要衝であったことも確かである。すなわち、延喜式に規定されている田子駅家がこの付近に想定されており、かつ、古代東山道が越後方面から善光寺平に入る、北の入り口に当たることからして明らかである。また、近世以降整備された北国街道もここを通ることからも、全時代にわたって、善光寺平の北の出入り口としての位置を保持してきたものと思われる。

本遺跡の近辺には、古墳時代からの重要な遺跡や遺物が多く発見されている。例えば、長野市の指定遺跡となっている駒沢祭祀遺跡は、この東側に位置し、また、隣り合わせの駒沢新町遺跡からは、阿弥陀三尊の懸仏鑄型が出土している（従来、これは懸仏の鑄型であるといわれてきたが、それと判断するには疑問も生じる。この点は今後に譲りたいが、正確な意味づけが今後の研究の発展につながるものと考えている）。また、少し離れた丘陵上には、吉古墳群が展開し、その下には、いくつかの瓦窯址の存在が指摘されている（田中窯址・東沢窯址など）。また、「善光寺瓦」が出土した牟礼バイパスもここからさほど遠くない位置に存在する。このようにこれまでの発掘成果からも、古墳時代からの一大豪族の拠点があったものと想定されるばかりか、古代仏教に関係する遺物が多く出土することが指摘されてきている。

また、仏教遺品としては、この近辺には、白鳳期の金銅仏である三千寺の銅造観音菩薩立像（重要文化財）が存在する。この仏像は客仏であるとする見方も存在するが、私はかなり古い時期（おそらく古代）からこの地に伝えられてきたものと考えている。なぜなら、昭和54年に、現在の堂宇から2～300m南の水田から瓦が出土している（『若槻史』）点や、三千寺という字名が現在まで残っていることからの推測である。同じ吉の地藏院には、藤原時代の仏像も伝わる。この仏像は、江戸時代大門脇の池から拾い上げられたものといわれる（『同上』）。

以上のことから、「若槻」地域における仏教文化は、善光寺平にあって特異な文化を形成していた地域であったことが想定される。では、本遺跡出土の仏教関係遺物の検討を通じて、この地域の位置付けを試みたい。

(2) 本遺跡出土の瓦と「善光寺瓦」

本遺跡からは、軒平瓦の破片2点が出土している。これは文様のごく一部が残るのみで全体像は不明である。一つは、重弧文軒平瓦を彷彿させるような文様を持つが、これを確定するにはあまりにも情報が乏しい（この瓦を便宜的に瓦1とする）。もう一つは、右上角に、葉柄が1cmほど残っているもので、これも全体像は不明である（便宜的に瓦2とする）。しかし、これらは明らかに、従来から言われている「善光寺瓦」とは文様を異にしている。すなわち「善光寺瓦」は直角から茎が出て文様が展開するのに比して、本遺跡出土の2点は、まったく「善光寺瓦」のそうした文様の展開が想定できないからである。

また瓦1・2ともに、これまでに善光寺平から出土している瓦との照合を行なったところ、これに該当するものが見当たらなかった。このうち、瓦2と同範の瓦をあえて近辺に求めるとするならば、信濃国分寺の瓦窯址出土の、均整蓮華文軒平瓦に似通った文様の展開が想定できた。しかし出土部分がかかなり限られていることと、瓦自体の焼き方や、厚さなどにかかなりの違いが見られるため、この点は即断できない。今後、瓦2と同範の瓦がこ

の近辺から出土し、この推測が実証できるとするならば、国分寺の建立を中心とした、善光寺平の寺院造営事業の一端が分かるばかりでなく、信濃国分寺の造営や修理事業に対する、この地域の豪族の動向が明らかになり、より、この地域の古代史が解明されることであろう。

瓦1は、瓦2と同じく「善光寺瓦」の文様でないことは明らかであるが、重弧文軒平瓦になるかどうかは、瓦2と同様に即断できない。今後、傍証資料の出土に期待したい。

ところで私は、「善光寺瓦」についての従来の研究に対する疑問を呈するとともに、今後の研究方向を示したことがあった（『長野市立博物館だより』19号）。その中で、善光寺唯一の研究から、「若槻」地区に仏教施設を想定しての研究も可能ではないかと述べた。この点についてはまだ確証は得られていないものの、今回の発掘成果は私のこうした推測を少しでも可能にする資料の提示ができたものと考えている。次にこの点について触れたい。

(3) 鷗尾・瓦塔の出土と古代寺院の存在

今回の報告で特に目を見張るものとして、いわゆる「善光寺瓦」以外の瓦の出土に加えて、鷗尾・瓦塔の出土がある。両者の細かい検討については別稿に譲るが、鷗尾に関しては、7世紀後半のものによく見られる調整痕を持つことが指摘されており、究めて示唆に富む。また、かなり大きな鷗尾であった可能性が指摘でき、こうした鷗尾を備えられる極めて大きな施設の存在も指摘できる。ところで、鷗尾は溝からの出土で、伴出遺物から奈良時代後半頃に少なくとも廃棄されたと考えられている。このことからすると、それ以前には施設の一部としての役割を果たしていたと考えられる。この施設については、延喜式に規定される、田子駅家などが考えられるのであるが、私はむしろ寺院に関係した施設に備え付けられていたものと考えている。この点は後述したい。

また、瓦塔は長野市内では初めての出土例となり、善光寺平の古代仏教のあり方を考えるうえで画期的なことといえる。また、この瓦塔に関しては平安時代前期（9世紀）のものであることが指摘されている。

両者の間にはかなり年代差があり、かつ、出土地点にもひらきがあることから即断し難いが、おそらくこの辺りには寺院、もしくは、集落の中に何らかの法会を行なう施設があったことが考えられる。近年の研究からは、集落からこうした遺物が伴出することが指摘されているが（須田勉「平安初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢』）、私は本遺跡に限った場合、須田氏の言われるような村落内寺院であるとするよりも、むしろ、この近辺に寺院が存在していた可能性の方が強いと考えている。以下、その根拠を列記したい。

まず第一に考えられることは、すでに指摘したように、この地は古東山道の支道（以降、越後から善光寺平に入るルート上の重要点と考える）の上で、きわめて重要な地点であったことである。すなわち、畿内から北陸道を通して、越後の国府を抜け善光寺平に入る、境界的な位置にあると考えている。このように北陸からの「文化流入」を考える理由は、先ず第一に、中世における京からの善光寺参詣ルートは主として北陸道を通してきている点である。これは牛山佳幸氏によって実証されているが（「中世における善光寺参詣路について」『善光寺門前町に関する総合的研究』）、このことからして、中世以前にすでに北陸回りのルートがかなり整備されていたことになる。こうしたルートが栄える理由として牛山氏は、白山・立山の参詣をかねて善光寺に詣でたなどの指摘をされているが、首肯すべきであろう。これとは別に、瓦の研究からは、新潟県新井市の栗原遺跡出土の軒丸瓦と、更埴市雨宮廃寺出土の軒丸瓦が近似していることが指摘されている（『新潟県史』通史編1原始古代）。前者は郡衙址と考えられているが、このように技術的あるいは、政治的に越後とのつながりが深かったことの指摘は、従来の研究で見落とされてきた点で、かなり興味深いものといえる。今後善光寺の参詣路の研究とともに考えていかなければいけない点であろう。このように、少なくとも中世（あるいは古代）以来、越後から信濃に入る東山道支道は重要なルートであったはずである。してみれば再三指摘しているように、越後から善光寺平に入るこの「若槻」地区に、往来者に対して、峠を越えてすぐ目に入る施設、言い換えるなら、当時の文化のシンボルで

あった寺を据えたのではなかろうか。これはあくまでも推測であり、何の確証も得られていないが、吉古墳群を中心とした豪族が、自分の力を誇示するための施設（寺）をここにいとんだと考えている。

第二に、旧徳間地域の地名を一瞥すると、寺に関する地名の多さに轟く。具体的には、「寺田」「寺西」「寺下」「本堂原」「坊山」である。この狭い地域にこれだけの字名が存在することは特筆すべきであり、かつ、これらの地名はいつの時代のものを反映しているのかはわからないが、少なくともこの地域を代表する寺の存在を想定したい。それは「本堂原」にあった「長徳寺」の存在がきわめて重要な位置をしめるからである。現在は廃寺となり詳しいことはわからないが、この寺のあった旧地には「鐘撞堂」「本堂原」「ドウマン沢」などの小字名が残り、きわめて大きな寺であったことが想定されるからである。またこの寺には、「相当年代の古い」阿弥陀像が存していたようである（『若槻史』）。これのみから即断すべきではないが、字「寺西」にある寺西八幡社の付近には、「付近古代瓦を産す」（『若槻史』296P）とあることから、発掘以前からこの付近から瓦が出ることが知られていたようであり、論拠としては有効であると思う。このことからして、傍証ではあるものの、古代寺院の存在を暗示するものとして捕らえたい。

第三に、吉古墳群中、第3号墳の石面に、「人物あるいは仏像の座像」のような線刻が施されていることである。これを仏像の線刻であると即断できないが、もしこれが古墳造営期に掘られたもので、仏像の線刻であるとしたならば、「若槻」地区を考える上できわめて興味深いものとなる。すなわち、北信濃にあってまだ古墳が造営されていた時期に、既に仏教を受け入れ、まつる豪族がこの地にいたことになるからである。

以上の点から勘案するに、この地域に古代寺院の存在を暗示する資料は断片的ながらあげられ、かつ、本遺跡の出土品をも考えあわせるなら、かなり可能性としては高いことを指摘しておきたい。また、それは本遺跡の北側に展開するものと考えたい。今後、諸資料の再検討が進めば、「若槻」のより詳しい古代史像が浮かび上がるものと確信している。

最後に、上田市立信濃国分寺資料館の倉澤正幸氏には瓦について多くの御教示を賜った。末筆ながら心より感謝申しあげたい。

（原田 和彦）

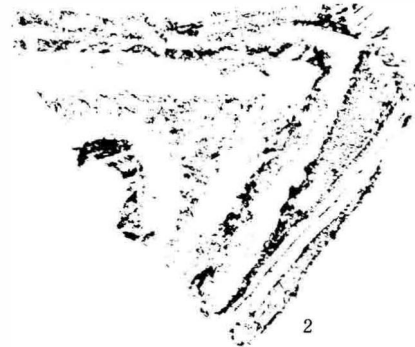
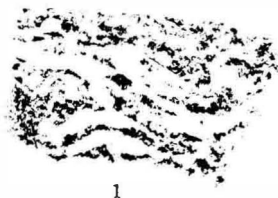


図164 瓦拓影

4 中近世遺物

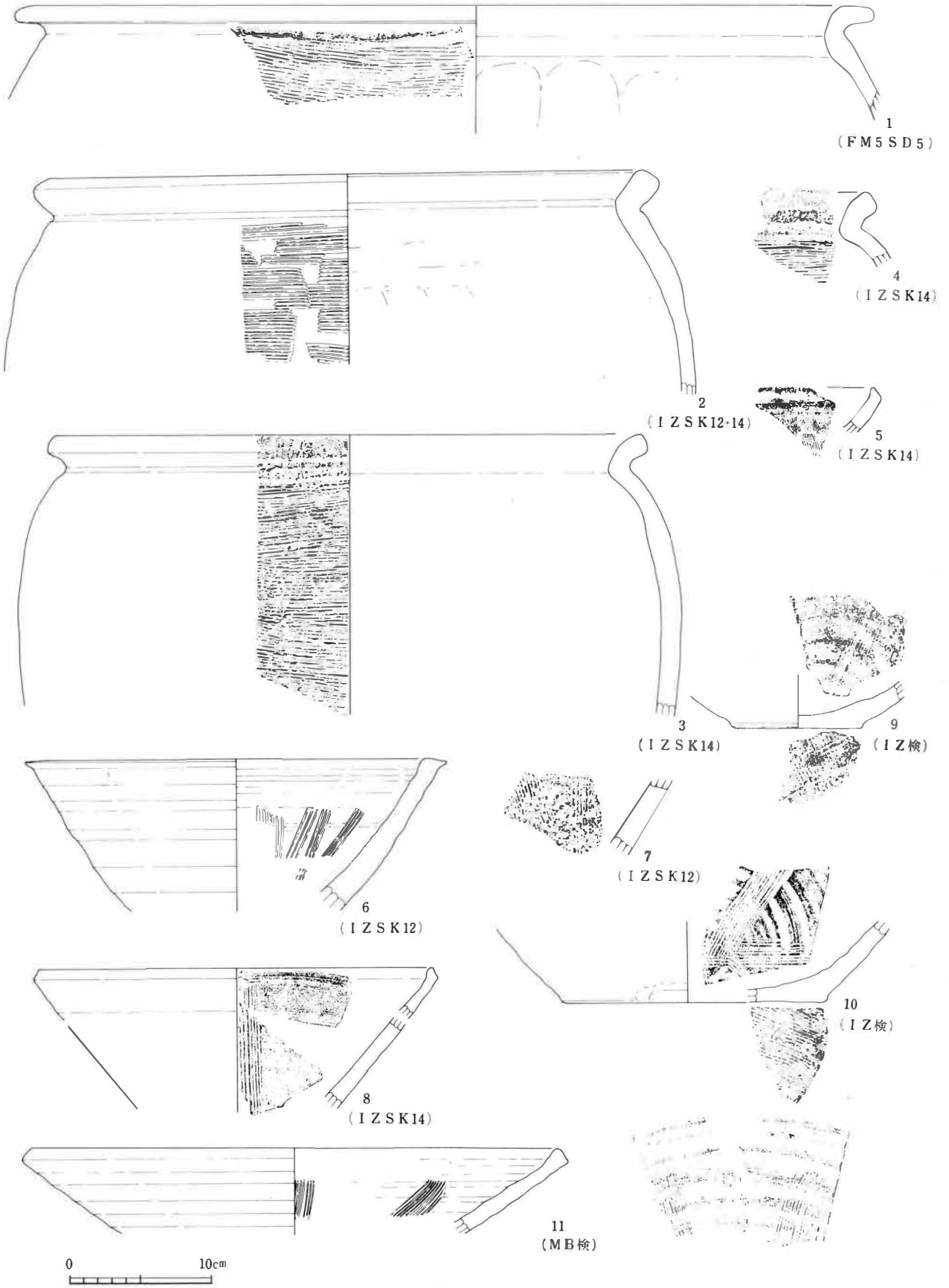


図162 中・近世遺物実測図①(1:4)

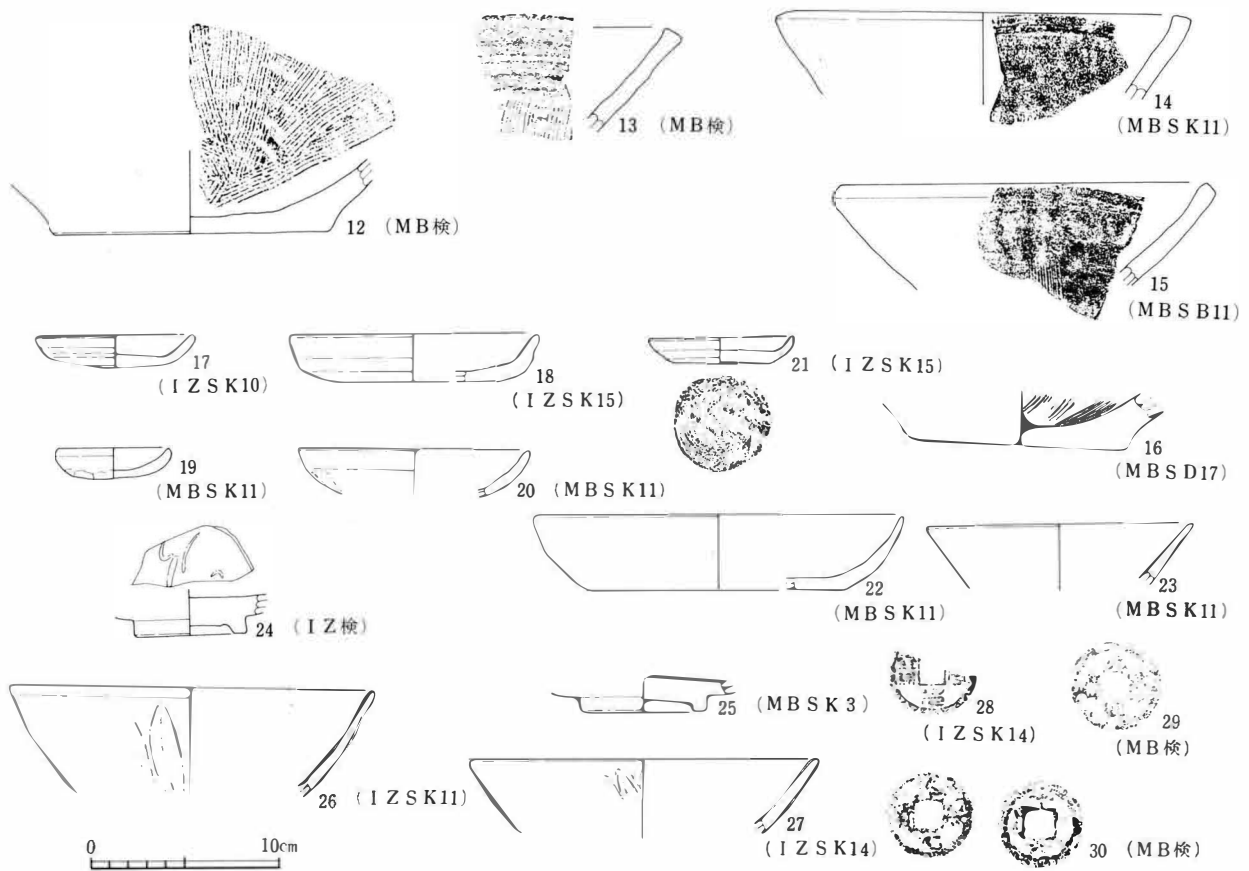


図163 中近世遺物実測図②(1:4)

地区	遺構	遺物 (外国産品)	遺物 (国産品)
IZ	SK 6	青磁碗・白磁(?)	灰釉瓶
"	SK12	青磁蓮弁文碗・白磁皿(口ハゲ)	灰釉碗(瀬戸)・すり鉢2(珠洲)
"	SK14	青磁碗(黄褐釉)	すり鉢(珠洲系)・甕(珠洲系)3・灰釉碗
"	SK10	なし	カワラケ(手捏様)
"	SK15	青磁蓮弁文碗	カワラケ(糸切底)
"	SK16	青磁碗(黄褐釉)・白磁小片	灰釉瓶
"	検出面	青磁碗(黄褐釉)	すり鉢(珠洲)
MB	SK 3	青磁碗	なし
"	SD 8	青磁蓮弁文碗・白磁小片	なし
FM 5	SD 5	染付碗・青磁(緑色)	なし
MB	SK11	なし	カワラケ(手捏様)2、土師質坏・すり鉢(珠洲) 灰釉碗・角釘2
MB	SD17	なし	甕(珠洲)

表22 中近世遺物一覧表

(森泉かよ子)

第5章 結 語

今回の調査では弥生時代中期から平安時代さらには中世にまで及ぶ、きわめて多数の遺構・遺物を検出した。各遺跡の範囲については未だ明確に確定し難いが、今回の調査内容はその質・量ともに従来の認識を大きく改めさせるに十分であろう。

特に今回の調査は、その調査面積の広大さもあってか、各時代、各時期における複数の集落遺跡の存在を確認し得た点に大きな成果があったといえよう。少なくとも弥生時代中期から平安時代にいたるまで、その規模に大小の差こそあれ、連綿と続く人々の生活の営みの痕跡を確認し得た。そしてまた集落域以外の部分においては、古代における大規模な開発の痕跡を確認し得たのである。

さらには、瓦塔や、鷗尾など予想もなかった特種な宗教関係遺物の出土も、この地域における古代仏教文化の展開を考察するうえできわめて貴重な成果としてとらえられるであろう。

しかし今回の調査は、想定される遺跡範囲からすればごく一部に試掘坑を設定したにすぎない。本地域の考古学的究明はすべて今後の課題である。区画整理事業の終了とともに本地域にも新たな開発の波が押し寄せてきている。本書がそうした開発行為との協調のもとにこの地域に存在する貴重な埋蔵文化財保護の一助となることを願い結語としたい。

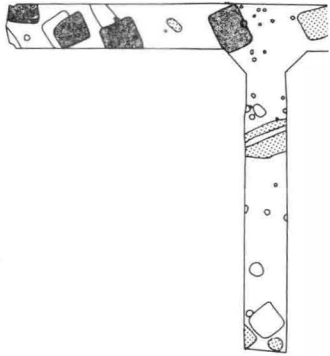
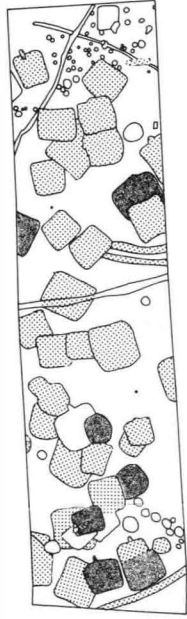
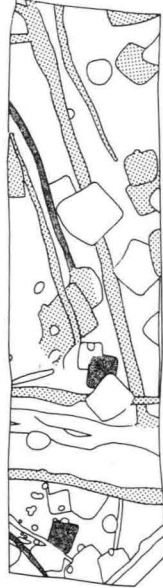
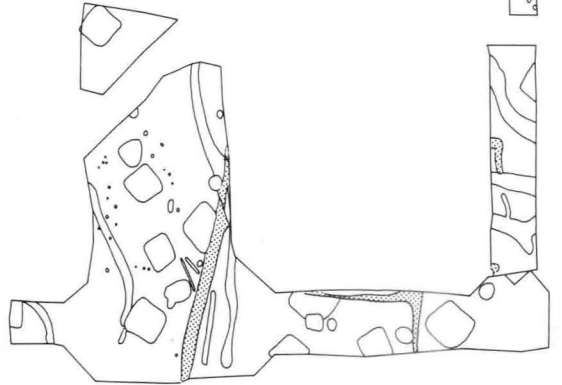
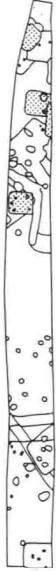
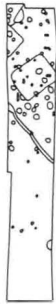
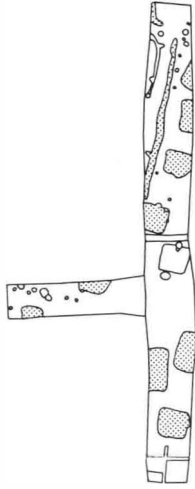
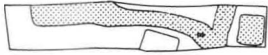
最後に酷暑・厳寒のさなか調査への協力を惜しまれなかった参加者の皆さん、ならびに調査から整理・報告書作成にいたるまでご指導・ご協力を賜った関係者各位に心から感謝申し上げたい。



調査参加者（稻積一里塚にて）







長野市の埋蔵文化財第47集
二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡
— 第1分冊 —

平成4年3月25日 印刷

平成4年3月30日 発行

編集 長野市教育委員会
発行 長野市埋蔵文化財センター

印刷 信毎書籍印刷株式会社